

## 【講演記録】

# CODAミュージアム カリン・レインダース館長来日記念講演会 「現代オランダのアート・ジュエリー：現況と展望」

日時：2019年10月18日（金）16時～18時

会場：東京国立近代美術館地下1階講堂

講演者：カリン・レインダース（CODAミュージアム館長）

通訳：数佐尚美

司会：北村仁美（東京国立近代美術館主任研究員）

## はじめに

CODAミュージアム<sup>1)</sup>（以下、CODA）は、オランダのアペルドールンに、視覚芸術を専門とするファン・レーカム美術館として1965年に開館した。1970年代には、世界的に興隆しつつあったコンテンポラリー・ジュエリーの収集を開始している。2015年には、国が所有するコンテンポラリー・ジュエリーのコレクションがCODAに移管されることとなり、同時に個人コレクターよりコスチューム・ジュエリーの寄贈も受けるなどして、現在同館はオランダ随一のジュエリー・コレクションを誇る。

レインダース氏は、CODA館長として、数々の展覧会、教育プログラム、国際的に活躍するアーティストの招へい事業を手がけ、また、マーストリヒト大学との共同研究として、ジュエリーのデジタル・ラボのプロジェクトを立ち上げるなど、コンテンポラリー・ジュエリーをさまざまな角度から紹介する意欲的な企画を実現。革新的なミュージアムの理念と活動にあてられる助成金を取得するなど、美術館運営の面においても優れた手腕を発揮している。

本講演は、CODAのジュエリー・コレクションの紹介という形をとりながらも、話題は人類とジュエリーの関係、コンテン

ポラリー・ジュエリーの意義などにも及んでいる。そこには、突出したコレクションを強みとして、世界のなかで存在意義を高めようとするCODAの世界戦略も垣間見える。

CODAの作品収集における理念や活動、そして同館が目指す美術館の展望を記録として残し、コンテンポラリー・ジュエリーへの恰好の導入テキストとして、また作家や美術館関係者への参考として、講演全体を本号に収録することとした。

なおこの講演会は、文化庁「令和元年度外国人芸術家・文化財専門家招へい事業」の一環として開催された。

本文は岸本、前文と脚注は島田が、それぞれ編集・執筆した。とくに明記のない場合、挿図は講演者からの提供図版による（CODA所蔵品）<sup>2)</sup>。文中（ ）内は編者による補足である。

## カリン・レインダース（以下、レインダース）：

みなさま、ようこそいらっしゃいました。本日はお招きいただき、ありがとうございます。

まずは皆様にお伺いします。ご来場の皆様の中で、ジュエリーを制作される方、ジュエリー作家の方はいらっしゃいますか。今ちょっと手を挙げていただけますか。（10名ほどが手を挙げる）ありがとうございます。それでは、講演を始めます。

## 1. ジュエリーの起源と現在に至る変遷

飾る、装うという行為は、人類の誕生とほぼ時を同じくして生まれたと言っても良いほど長い歴史があります。貴金属や宝石を身に着けることは、太古の昔から、富や権力、社会的地位の顕示とも言われていました。飾ると装うという行為は、美の概念と同様に、何世紀も前から哲学、芸術上の議論の対象となってきました。これはまさに人間ならではの行為であって、20世紀の初頭から、立ち居振る舞いや、衣服、宝飾品を、人々は社会に生きる自己の人生観を表す手段としてきました。この人



図1 講演会の様子

生観というのは、自由を求める心、自覚、自主性の表現、アイデンティティを強調したり探求したりする精神に根ざしています。

コンテンポラリー・ジュエリーのデザインには、個々人の発想や気分、また主張が目に見える形で現れていたり、話題性を狙いとした要素や、過去の記憶を呼び起こす要素が取り入れられていたりします。また、ジュエリーは時代の変化とともに次々生まれる新たな流行の表現であり、特に若い人の中では、アクセサリを着けたり、着け替えたりすることがファッションにおいて重要な役割を担っています。

ジュエリーには富の象徴という側面もあります。宝石商などが扱う宝石、貴石、真珠、金、貴金属は豊かさを演出する商品です。だからこそ多くの人が宝石店で、ジュエリーを買うわけです。若者や予算が限られた人向けには、ファッションチェーンのお店がありますよね。ZARAやH&M、スカンジナビア諸国においてはCOS(コス)というブランドがあり、非常に個性的で面白いジュエリーを安価で販売しています。面白いと言いましたけれども、もちろん質が非常に重要になります。

昨日、東京のとあるギャラリーで、さまざまなものを見る機会に恵まれました。このギャラリーでは、過去にジュエリー作家の小倉理都子の個展が開催されたとのことで、色々なジュエリーがある中で、コンテンポラリー・ジュエリーのカテゴリーに属するものが展示されたことを知り、嬉しく思いました。

まずはこちらの写真をご覧ください(図2)。スイス出身でドイツのミュンヘンに在住しているデビッド・ビランダー<sup>3)</sup>の作品です。これは軽金属でできたネックレスで、見て分かるように、非常に印象的な大蛇の形をしています。足の方まで届くほど長く、ブルーの色合いの中に紫がかかったような光もある非常に印象的なものです。このような作品は、身に着けているだけで本当に力強い印象を与えます。

## 2. コレクションについて

45年前、CODAの前身となるファン・レーカム美術館<sup>4)</sup>によって、現在のジュエリー・コレクションの基礎が築かれました。CODAのコレクションは購入、寄付、寄贈、遺贈、および長期間にわたる多くの寄託品によって拡大してきました。近年の遺贈によって収集されたものとしては、オノン・ブックハウト<sup>5)</sup>、クリ

ス・ステーンベルゲン<sup>6)</sup>、ニコラス・テュイス<sup>7)</sup>などのデザイナーによる作品群があり、これらはコレクションの中でも重要な位置を占めています。

2015年10月に、CODAに国のジュエリー・コレクションの移管が行われました。また、その同じ年に宝くじ財団から25万ユーロの多額の寄付を受けました。それを利用してコスチューム・ジュエリーを買い付け、コレクションをさらに拡大しました。それに加えて、ある金融機関の寄付により「ダッチ・ジュエリー・プラットフォーム」というオンラインサービスを開始しました(www.dutchjewelleryplatform.nl)。これは2019年の末には、英語で「ジュエリーミュージム」と呼ばれる新しいウェブアプリケーションに置き換えられる予定です。

CODAの現在のジュエリー収蔵件数は9000件を超え、コンテンポラリー・ジュエリーにおける世界最大のコレクションとなっています。今後も引き続き、購入、寄付、遺贈、寄託を通じて増え続けると見込まれます。私たちは、そのような多様なコレクションのなかで、関連するテーマに基づいて展示を構成することで、まるで色とりどりの「織物」のように関心をそそる企画となるように心がけています。また、ジュエリーの分野で国際的に名の知られたアーティスト達をプリンシパル・アーティストとして位置付け、45名を選定しました。2、3年に一度、彼らの作品を中心にして展示を行っています。展示を通して、プリンシパル・アーティストたちの系譜を辿り、彼らの作風がどう発展をしているかを追いかけていくことが可能になります。

また、先ほども触れたオンライン展開の取り組みですが、本格稼働に向けて作品の完全なデジタル化に取り組んでいます。デジタル化されたコンテンツは2019年末、あるいは遅ければ2020年初頭にCODAのプラットフォームを通じて、どなたでも、もちろん日本の方々にも閲覧いただけるようになります。

## 3. CODAミュージアムについて—統計データと展覧会企画—

こちらの写真をご覧ください(図3)。CODAの正面玄関です。今年の6月に公開されたばかりのまったく新しい建物です。

CODAに関わる統計データをいくつかご紹介しましょう。CODAは、オランダの首都アムステルダムから列車で1時間ほどの距離にあるアベルドールンという

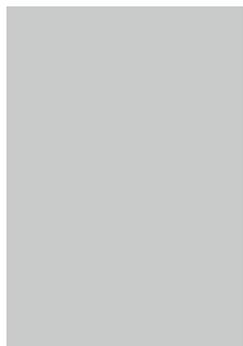


図2 デビッド・ビランダー《パイソン》(The Jewellery Collection 展ポスター) 2011年

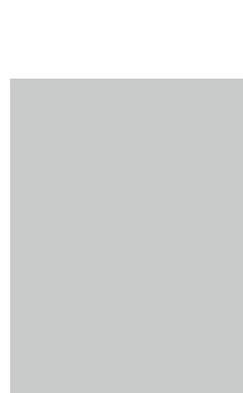


図3 CODAミュージアム外観

街にあります。人口は16万人ほどで、CODAはその街において複数の機能を備えた文化施設です。地方自治体の補助金のようなかたちで690万ユーロが年間予算として提供され、事業運営に使われています。在籍するスタッフは110名ですが、美術館だけではなく、公共の図書館、公文書館や博物館なども含まれます。そして250人のボランティアが貢献しています。

2年に1回「CODAペーパー・アート」という展覧会を開催しています。実はアベルドールンという街は、製紙業が非常に盛んなところで、19世紀の頃から蒸気による製紙場が街中にありました。今でもダンボールや各種紙を作る製紙会社があります。そういった歴史的経緯もあって、CODAではペーパー・アート展を開いています。この展示には全世界から30カ国を超える国籍の方が参加して、ジュエリーだけでなく様々な紙でできた彫刻や絵画なども展示しています。

コレクション展示スペースのヴィトリン(ガラス張りで見える展示ケース)では、3か月に1回ほどテーマを変えて展示替えしています。現在開催中のコレクション展示では、ジュエリー作品の背面部を見せるということがテーマです。普通、美術館の展示物は、絶対に後ろ側は覗けません。この展覧会では、ケース内に鏡を取り付けることによって作品の裏側がどうなっているのかが見られるようになっています。

#### 4. 既成概念にとらわれないジュエリー

ヘレン・ブリットン<sup>8)</sup>は蜘蛛の作品で知られています。ブリットンの経歴や情報を検索すると、インターネット上で実際にこの蜘蛛が動いている様子を撮影した動画を見ることが出来ます。それ自体も映像として面白いものですが、ジュエリーに動く仕組みを盛り込んだことが興味深い点だと思いました。

10日ほど前に、CODAで開催されていたリサ・ウォーカー<sup>9)</sup>の個展が終わりました。彼女はコンセプチュアル・アーティストとして、自分自身の作品を追求し、例えば、コンピューターにロープを巻いてそれをネックレスと称するなど、既成概念やルールにとらわれないものをジュエリーとして展示しました。できるだけ見る人に近い場所に作品を展示したいという考えから、一般的なガラスの展示ケースは使わずに展示するなど、展示方法も作家自身で考案しました。

1960年代、70年代になると、マリア・ヘイス<sup>10)</sup>のような、今までジュエリーとしては用いられなかった素材を使って作品を作るアーティストが登場してきました。彼女は、一見するとヘアブラシに見えるブローチや、金属製のスーツケースに見えるアクセサリなどを発表しています。この作品(図4)は、いわゆる花壇に水をやる時のホースに切り込みを入れて作られ

たプレスレットです。このように、プラスチックをはじめとしたまったく新しい素材を使い、そこに新たな機能を持たせたジュエリーを展開しました。非常に興味深いものであると同時に、当時は多くの人がそれを見て驚愕したり、ショックを受けたりしました。

こういった新しい素材のジュエリーに続いて注目されたのが、1980年頃に流行ったボタンです。さらに近年、文字どおり身体を装飾するものとして、ピアシングそしてタトゥー、ボディピアスなどが台頭してきました。ビジュアル・アーティストやデザイナーは、こういったアイデアの変化に敏感で、新たな展開の火付け役になることも多かったようです。また、タトゥーは文字どおり体を飾るということですが、オランダでは、多くの人が様々な種類のタトゥーを入れています。隠れたところにこっそり自分だけのためにタトゥーを入れるのではなく、ほかの人に見せるように、見えるところに入れる人が多くなりました。

#### 5. ジュエリーの本質的な価値

次にご紹介するのは、ポール・デレス<sup>11)</sup>です。彼は、様々なアーティストの中でも特に、ジュエリーは自己表現の手段の一つである、という主張を強く持っています。

ライフスタイルが変化したり、アイデンティティがその人ごとに異なったりする一方で、多くの消費者には、身につけるもののデザインに積極的に関わろうとする傾向がある、とデレスは考えています。彼は、人々が自分らしさの追求としてデザインに関わろうとする、一つのムーブメントを捉えたアーティストだと言えます。

デレスの作品に、ピアスでベニスを表したものがあります。彼は、時に自分がジュエリー作家として意図したもの以外のメッセージを、着用者が作品から受け取り、発信している場合



図4 マリア・ヘイス《アームバンド》1978年

があることに気がつきました。まずジュエリーを着けると、間違いなく着けている者とそれを見る者との間のコミュニケーションが活性化しますよね。この時、制作者の意図とはかけ離れたメッセージを、作品が発信する場合があります。デレスの作品の場合、制作者としてはいわゆる同性愛のエロティシズムを意図したものでしたが、中年女性たちは別のメッセージを込めて着用しました。作品から想起させられるHIVウィルスの話や同性愛に伴う色々な事情については、悲しい歴史もありますが、それはデザインによって人生の喜びを伝えるものでもありました。それに賛同した一般消費者が、自身は男性ではないけれども賛同の意を示そうとペニスをかたどったジュエリーを身に着けていたということだったのです。

ジュエリーには、芸術的、触覚的、視覚的、意思疎通上の特性があって、人はそれらを様々な形で体験していきます。ジュエリーの持つ知的な、あるいは概念的な側面や、職人の技術レベルなどについては、たびたび議論されてきました。ただ、一般的に円や正方形、平面、直線といった基本的な幾何学形態が主流だったのは過去のことで、今は素材、概念などに創作のヒントを得て、文字どおりなんでも自由に表現することができます。

時代の移り変わりに伴って、CODAコレクションにおけるジュエリーの呼び方は変化してきました。まず、モダン・ジュエリーと呼ばれ、コンテンポラリー・ジュエリー、そしてプレゼントデイ・ジュエリー(Present-day jewellery)といった呼称が使われました。今最もよく使われているのは、アート・ジュエリーという呼称です。最近では、ジュエリー作家やデザイナー、ビジュアル・アーティストはオランダ国内外の芸術アカデミーの出身であることが多々あります。これらの芸術アカデミーには、それぞれ独自の考え方やポリシーがあり、教え方も異なります。こういった作家たちは、視覚芸術の歴史的なテーマや、社会性のあるテーマに創作のインスピレーションを得ています。こうして、伝統工芸や職人の技から脱却して、時代の先端をいくデザインが中心になってきました。

20世紀に入るとアート・ジュエリーは、美術史における様式の一つに数えられ、自律的かつ心理的な表現の一形式と見なされるようになりました。とはいえ、ジュエリーは果たして応用美術なのか、あるいは自律的な視覚芸術なのかという議論は続いています。その結論はまだ出ておらず、関係者の多くが盛んに議論を戦わせています。その一方で、一般人は男性であれ女性であれ、そういった議論の存在も意識せず、相変わらず専門店でジュエリーを買っているのです。

CODAにとって、この議論はあまり関係がありません。ジュエリーには芸術としての価値が本質的に備わっています。私たち

は、ジュエリーを小さな彫刻という芸術品として展示したいと考えています。確かにジュエリー作品の多くは実際に着用することができます。それは美しい作品を身に着けることで持ち歩くことができるということであり、ジュエリーならではの付加価値となっています。いわゆるボディ・アートとかボディ・ジュエルといった言葉の定義は、説明的なもので、身体のための「宝石」という的確な意味を持ちます。

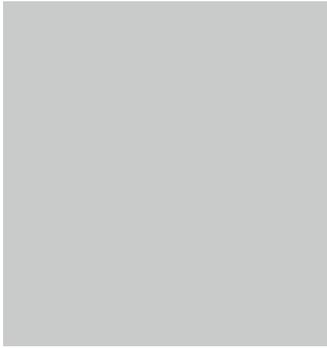
ジュエリーのもう一つの重要な付加価値は、伝達力です。ジュエリーには、物語を語る力があると私たちは考えています。「ホモ・サピエンス(Homo sapiens)」という言葉には、人間の本质は理性にあるという意味が隠れています。一方、「ホモ・ナランス(Homo narrans)」という言葉は、人間の本质は物語る能力にあるということの意味をしています。数十年間にわたり私たちは、CODAのコレクションを自律的な芸術と応用美術の境界線にある作品群として位置付けてきました。しかし、この境界線はもはや曖昧になりつつあり、私たちにとっては興味深いものとは言えなくなってきています。境界というのは、飛び越えようと思えば飛び越えられるものです。ジュエリーを制作するうえで境界を越えようと試みる人もいますが、境界のどちら側にあっても、私たちはジュエリーを文字どおり、コンパクトな形の視覚芸術として捉えています。ものごとの全体像は、ジュエリーが自律的な芸術か、応用美術かという議論だけでは見えてきません。オランダのアーティストの中でも傑出した存在であり、なおかつ教師としても非常に大きな存在であったオンノ・ブックハウトの言葉を引用すれば「壁を取り払うことによって、視界が広がる」ということです。

## 6. プリンシパル・アーティストの代表—オンノ・ブックハウト

オンノ・ブックハウトによる《ルーム・フォー・フィンガーズ》というジュエリー作品があります。これは指輪ですが、指輪を買い付けるバイヤーがブックハウトに、「あなたのこの作品は指が入りにくくて、着用するには向いていないですね」とコメントした時に、彼は「この指輪に指が入りやすいかどうかは、ジュエリーとしての役割にあまり関係がありません。もし指を一生懸命入れようとして痛むとしても、それはそれで、このジュエリーの一部なのです」と答えたそうです。

こちらにご紹介しているのが、ブックハウトの遺したジュエリーの一部です。シルバーも非常に気に入って素材として生かしていたようです(図5)。それ以外にも鉄材をプレスレットに活用しています。非常に優れた教師でもあったブックハウトは、自分が作業して何かを制作した成果や結果以上に、その過程

図5 オンノ・ブックハウト《ブローチ》1990年



が重要であると述べています。どのような実験をしたか、どのような試作をしたかが重要で、何かを発見することよりも、きちんと目を光らせてものを観察することが大切であると常に教えていたそうです。

オンノ・ブックハウトは、2003年に自動車事故で急死されました。急死を受け、国から遺贈品や遺作などを含めて、彼の作品をコレクションとして譲り受けました。その中には、彼自身が書いた詩や、手紙などの関連資料も含まれていたため、プライベートなものや公にできるものを分ける作業などを私たちCODAで行いました。そして選んだ資料や作品を、テーマごとに仕分けて本棚のように組み上げた箱に入れて展示しました。展示会のタイトルは英語に直すと「ワーク・イン・プログレス」です。これはブックハウトの作品や遺品の受入れ作業が、まさに現在進行中であることを示す、非常に印象的な展示となりました。このような形でアーカイブすることで、色々な作品の価値を世に示すことができ、それと同時に、ブックハウトが教師として非常に優れており、今なお影響力があることを伝えることができました。

## 7. CODAコレクションとその収集方針

同じ頃、CODAでは、国際的な視点でより広範囲に収集を進めることが決定されました。アムステルダムには、ジュエリーを専門とするギャラリーがいくつかありますが、そうしたギャラリーと、CODAは長年にわたって緊密な関係を築いており、収集活動を行なう際の重要な情報源としています。

ジュエリーの話題性は、収蔵の判断基準の中でも最も重要で、個々の作品に本来備わっている質として不可欠な要素です。クオリティが本質的に高くない作品は、私たちのコレクションの対象外です。オランダのアート・ジュエリーが芸術の一形態として受け止められるようになり、専門家の注目を集めるほど重視されるまで50年以上という長い年月がかかり

ました。しかしながら、今日では、世界中の多くのジュエリー・デザイナーが芸術的で、質の高い作品を生み出し続けています。

アムステルダムの非常に重要な芸術学校として、ヘリット・リートフェルト・アカデミーがあります。エミ・ファン・レールサム<sup>12)</sup>もここで学びました。彼女が1960年代頃に発表したネックレスとプレスレットの素材には、煙突が使われています。その当時、金属で作られた煙突を変形させてネックレスとプレスレットを作るという手法は、衝撃的でした。

このような作品を作るアーティストは、対象物への介入をできるだけ最小限に抑え、最大限の効果を生み出すことができるという考えを抱いているようです。つまり、なにか余計な装飾を加えるのではなく、そして偶然性なども求めずに、作品を作るという考え方です。

先ほどご紹介しましたエミ・ファン・レールサムやハイス・バックナー<sup>13)</sup>は、非常に有名ですが、彼らに比べると知名度は高くないものの、クリス・ステーンベルゲン、ニコラス・テュイスという2人のアーティストも、意義深い貢献をしたと私は思っています。彼らは革新的なクリエイターで、どちらかといえばマーケティング的な観点から、自分たちの芸術を世に出すために取り組んでいました。シルバー、ゴールド、クリスタルといった割と普通の素材を使いながら、その制作のアプローチはまったく斬新なものでした(図6)。

## 8. 教師と教え子

ジュエリーの発展、作品の系譜についてお話しするうえで、私は特に、教師と教え子といった関係を強調したいと考えています。教師と教え子には、色々な技術などを伝えていくなかで、様々な共通点が見られることがあります。オンノ・ブックハウトの純金による作品は、彼の教え子であるドロテア・ブリュール<sup>14)</sup>



図6 ニコラス・テュイス《無題》

という優れたアーティストの作品と比較できるでしょう。ブリュールの作品にはシルバーが使われています。

さらに、ブリュールとアンティエ・プロイアー<sup>15)</sup>の作品には共通のテーマがあるように見えます。ブリュールは教師として、教え子のプロイアーが自分らしさを発揮できることを望んでいましたが、少し真似が多く、その点はあまり良い評価をしていなかったようです。CODAでは、プロイアーの作品を最近では収集していません。

ブリュールの教え子のキャスリーン・フィンク<sup>16)</sup>も、非常に才能のある優れたアーティストです。私たちは、たとえ制作者としての経験が10年もなく、まだ学生であっても、真に才能の片鱗が見えれば早い時期に作品を購入することもあります。ですから、今日会場にいらっしゃる学生の方や、若い作家の皆さんがどのような作品を作られるのかも知りたいと思っています。

次にご紹介するのは、ブックハウトの門下生であるルーシー・サーニール<sup>17)</sup>です。この作品は、非常に魅力的なネックレスです(図7)。木製のボウルとビーズを使って、紺碧の空が表現されていて、そして星が散りばめられています。サーニールは、オランダで勉強しています。ブックハウトはオランダだけではなく、ロンドンのアカデミーでも教えていました。

アンネリース・プラントタイド<sup>18)</sup>も、ブックハウトの教え子です。学生の頃からジュエリーに対する構想という点で、非常に優れていました。作品では、18金を使っています。

オットー・クンツリー<sup>19)</sup>というコンセプチュアル・アーティストの作品もご覧ください。ドイツのミュンヘンのアカデミーで、多くの教え子に色々な教育、指導をしていました。胸にピンと輪ゴムのようなものを使って着用するブローチなどが知られています。



図7 ルーシー・サーニール《星降る夜のドライブ》2011年

## 9. コスチューム・ジュエリー

1920年代にココ・シャネルは、「ジュエリーといえば金銀宝石である」という当時の既存概念から脱却し、手頃な値段のコスチューム・ジュエリーを発表しました。ガラスやフェイクパールといった代用素材を用いながらも、高級感と贅沢感を演出し、誰でも手が届きやすい価格設定にしていました。当時、とりわけ注目されていた装身具はクリップでした。素材に使用した金属と樹脂は、見るからにモダンであり、安価で複製に適しているということで、人気のある素材でした。クリップは、もう一つ別のクリップと組み合わせてバックルとして使ったり、ドレスの襟元を飾るジュエリーとして、あるいは服のドレープを固定する飾りとして使われていました。

CODAのコスチューム・ジュエリー・コレクション中でも、ロプスターをかたどった、とりわけ人目を引く作品があります。アメリカでコスチューム・ジュエリーを取り引いていたご婦人から購入しました。この方がよくおっしゃっていたエピソードがあります。夫婦でロプスターなどを食べられるレストランに行った時、奥さんがこの作品を着けて行ったところ、それがあまりに人目を引きレストラン中の人々が注目しているので、一緒にいたご主人はそれが気に入らない様子だったそうです。この作品の作者はデイヴィッド・マンデル<sup>20)</sup>です。身体の前方から後方に至るまでの大きな面積を占める巨大なアクセサリーとなっています。この他に、マンデルが経営に参画する会社(The Show Must Go On)には、クルーズや動物、葎などがあしらわれた作品もあります。

その当時、フランスにおいてココ・シャネルの存在は本当に人気があり、また影響力も大きいものでした。伝統的でありながら、斬新なデザインで、さまざまな材料や素材を使っていました。なおかつ素材は本物だけではないので、安価に手に入るという点でも、非常に人気を博しました。

アムステルダムに拠点を置くジェム・キングダム<sup>21)</sup>という会社は、いわゆるコスチューム・ジュエリーをよく手がけている会社です。この会社の作る《ハッピー・ベイビー》という作品は、キュービー人形のような赤ちゃんの特徴ある姿を模しており、アジア諸国において非常に関心を集めています。

## 10. 様々な素材のジュエリー

ステファン・ホイザー<sup>22)</sup>は、オットー・クンツリーの門下生としてドイツで学びました。彼の作品は、ハートの形をしたペンダントとして見ると極めて従来型ですが、実は固めた母乳を素材として作られているという点において斬新で、独自のあり方を示しています。

先ほど蜘蛛のジュエリーをご紹介したヘレン・ブリットンの作品に、様々な鍵がついているネックレスがあります。多種の半貴石、ラピスラズリなどが用いられていますが、これらの鍵は家の中でドアを開けるために使う鍵を意味しており、その個々のドアにはそれぞれにストーリーがある、というエピソードが作品の背景にあります。

アレクサンダー・ブランク<sup>23)</sup>は、樹脂とシルバーを使い、狐もしくは兎のモチーフを作品にしています。アペルドールンという地方は、豊かな自然に恵まれた場所であり、私たちのコレクションは、そういった地理的状況も反映しています。多くのアーティストが、例えば森林のなかにいるような動物や花々から創作の刺激を得て、作品を作っています。ジュエリーのテーマには、鹿やハリネズミ、固有種、特有の蛇などが繰り返し登場します。

中国での開催を皮切りに、ようやくアペルドールンに到達した「21グラム」という巡回展のお話をしましょう。人が病に苦しんでいる時、あるいはまさに死ぬというその時、魂の重さが21グラム軽くなるという考え方があります。この巡回展は、そのような考え方をテーマにしています。この考えにヒントを得て制作を展開した人々に、テッド・ノートン<sup>24)</sup>やルード・ピーターズ<sup>25)</sup>らがいます。ノートンはコンセプチュアル・アーティストで、ピーターズはこの運動の中心人物でした。ピーターズが制作したネックレスは、ヒンズーのシンボルを生かしています。彼は、オン・ブックハウトの後継者として、アムステルダムのヘリット・リートフェルト・アカデミーで教えています。

ピーターズの弟子にあたるフェリケ・ファン・デル・リースト<sup>26)</sup>は、ノルウェーで活動しています。彼女のネックレスは、家をかたどっていて鉛筆など色々な素材を使って窓を表し、いかにも暖かい家といった様子が表現されています。このようなジュエリーは身に着けるだけで、人の話題をさらってしまうような力があります。

テルヒ・トルヴァネン<sup>27)</sup>はもともとフィンランドの出身で、オランダのアムステルダムのアカデミーで学び、その後フランスに拠点を移しています。どのような場所に身を置いても、ひらめきや原始的な創作意欲の源は、いつも自然から得ていました。例えば、陶器のようなものや、木材などを利用して色々な作品を作っています。

もう一人興味深いアーティストをご紹介します。ヘリット・リートフェルト・アカデミーの出身者でもあるベッペ・ケスラー<sup>28)</sup>は、テキスタイルデザインから出発しました。自分の実家の庭に生えていたニレの木を使った作品で知られます。近年は、ガラスとその下に絵画があしらわれた作品などを作っています。

CODAがずっと追いかけているプリンシパル・アーティストの一人であるヘレン・ブリットンのネックレスは、18金と普通のプラスチックのビーズを用いて作られています。見る人によっては、せっかく美しい18金があるのに、そこにどこでも手に入るようなプラスチックを組み合わせるなんて……と残念に思うかもしれません。しかし、私の意見としては、本当に見事な作品に仕上がっていると思います。

デビッド・ピランダーは、日本の鯉をかたどった作品を発表しています。オレンジと白のバージョンとオレンジと黒のバージョンがあり、中心部は木製です。その他に、ニンニクをテーマとして作られたネックレスもあり、チタンを素材にして非常に軽量で、ネックレスとして完成度の高いものに仕上がっています。

フェリケ・ファン・デル・リーストの作品に、非常に面白いプレスレットがあります。これは、アメリカでよくあるカウボーイが活躍している地域で、いわゆる組織犯罪の悪名高きギャング団を犬として表現しています。囚人服姿の犬が6匹、足枷をつけられ鎖で繋がれています。お互い繋がっているので、一匹一匹は自由には動けないという状況になっています。

## 11. 紙とテキスタイル

こちらは、ネル・リンセン<sup>29)</sup>という数年前に亡くなったオランダのアーティストがデザインしたネックレスになります(図8)。CODAにも、数多くのネックレスやプレスレットの作品が収蔵



図8 ネル・リンセン《無題》

されています。先ほども触れましたが、アベルドールンのもとと製紙業が盛んだったという伝統と文化的基盤から、私たちは2年に1回ペーパー・アートの展覧会を開いています。そこでは、紙やダンボールを使ったジュエリーも展示しています。

またもう一つ、紙を材料として使ったネックレスを紹介しましょう。アルゼンチン出身のルイス・アコスタ<sup>30)</sup>の作品で、CODAコレクションにもネックレスなどが収蔵されています。ネックレスやプレスレットは、展示する際にある程度のボリュームがあるので、鑑賞しやすいという利点もあります。ジュエリーといえば、まず指輪やイヤリングを思い浮かべるかもしれませんが、それらは展示ケースの中に並べたときに、小さく見えることもあります。そのため、ボリュームという観点から言っても私たちはネックレスなどを多く購入しています。

小倉理都子<sup>31)</sup>の作品は、CODAコレクションでは、プローチ3点を収蔵しています。

実際の銀行紙幣を素材としてジュエリーを作っているアーティストもいます。ティネ・デ・ルイセル<sup>32)</sup>は、ベルギーのアントワープを拠点として活動しています。またローレン・ヴァネッサ・ティックル<sup>33)</sup>というアメリカの作家も、1ドル紙幣を使ったネックレスを発表しており、主な素材としてはシルバーが使われています。かなり重量があるのですが、そのディテールを見ますと、細かく切られた1ドル札が使われています。1ドルという金額は金銭的価値としては、あまり多くを買いませんが、このようにジュエリーという芸術品として世に出すことによって、その価値が上がることがこの作品の興味深い点です。

次はキャロライン・ブロードヘッド<sup>34)</sup>というイギリスの作家です。彼女の作品は、イギリスのレスターの学校を出たばかりの1970年代頃に作られた初期作品が収蔵されています。紙とテキスタイルには、ある程度の素材的な共通性と類似性があります。CODAではテキスタイルも、ジュエリーの一素材として扱っています。ブロードヘッドは、イギリスで教育を受けて、非常に名声のあるロンドンのセントラル・スクール・オブ・アート・アンド・クラフツというところで教鞭をとりました。セント・マーチン・スクール・オブ・アート(両校は1989年に合併)というもう一つの有名な学校でも教えていましたが、最近退職されたので、自身の作品を制作する余裕が少し生まれてきたのではないかと思います。プリンシパル・アーティストとしてCODAで追いかけているアーティストは皆、個展を開催しているので、ブロードヘッドの個展もいずれ開催され、作品を見られるようになるかと思います。

ラム・デ・ウォルフ<sup>35)</sup>は、もう80歳くらいになられるご婦人なのですが、アムステルダムへのリット・リートフェルト・アカデミーで教鞭をとっていたことがあり、テキスタイルと紙を主な素材として様々なジュエリーを作っています。

ラム・デ・ウォルフのインスタレーション作品は、3年ほど前にCODAで展示されました。非常に時間と労力がかけられた作品でした。この作品は壁にたくさんの釘を打ち、そこに小さな書物として本を置いています。本には詩が書かれていたり、曲の歌詞が書かれていたりしますが、全体として見ると、まるで鳥が羽を広げて飛んでいるかのように見えます。手紙や本を材料にしながら、全く違うものに見せている点で非常に魅力的な作品です。

## 12. ジュエリーミュージアムとしての取り組み

コレクションというのは美術館、博物館の中の可動部分として解釈することができます。様々な方法で光をあてることが可能です。現代アートとデザインのコレクションは、現在と未来を対象としているため、比較的自由に定義することができますが、あくまでそのミュージアムの空間構成に関わる問題提起であり、その環境に応じて変わってきます。問題は、コンテンポラリー・ジュエリーの収集対象が広大な流域に及ぶため、作品を選定する際は一貫した方針が必要になるということです。ミュージアムのために収集していくプロセスには、積極的な関わりとたゆまぬ努力が求められます。

CODAはオランダを代表する、これこそがジュエリーのミュージアムだという存在になりたいと考えています。その目標を念頭に置いて、CODAはジュエリー・デザインの視覚芸術における認知度を上げて地位を確立し、恒久的な領域として認められることを目指していきたいと考えています。CODAの所蔵品からなる展示に加えて、色々なアーティストの個展や、社会的テーマ、あるいは素材をテーマとした展示や、色だけに焦点をあてた展示なども企画していきます。今後数年間、私たちはいわゆるプリンシパル・アーティストの活動を追うだけではなく、新しい作品を収蔵し、またその関連資料などを充実させることに力を入れていく予定です。そのため、アートの新たな潮流や、社会の動向の把握も怠らず進めていこうと考えています。現在、しっかりとしたコンセプトで本質的で力強いものを持った作品に特に注目しています。さらに、博物館的な価値、つまりミュージアムで展示するための視覚的価値を備えているかどうかという判断基準にかなっている作品であれば積極的に収集し、学校を卒業した後の若いアーティストの活動にも注目しています。

スクリーンでご覧いただいているのは、オランダを代表するジュエリー作家の一人であるハンス・アッペンツェラー<sup>36)</sup>の作品です。

先ほどから触れていますが、私たちはオランダ国家のコレクションから400点ほどの移管を受けました。元々これらのジュ



図9 小嶋崇嗣《ポイント・エフェクト》2019年

エリーは政府が巡回展をするために収集してきたもので、国内でも特に文化的なインフラが整っていない地域を中心に、空白を埋めるようなかたちで展開していく活動を行いました。これには教育的、あるいは啓蒙的な意味があります。このように一カ所のミュージアムに美しい作品をとどめるのではなく、色々なところで開催するという考え方は、ジュエリーには非常に向いていると思います。荷物の中にスーツケースをあ一つ余計に加えて、その中に色々な小さな彫刻のような作品を入れていく。それが巡回展の醍醐味だと思っています。

それでは、CODAが最近購入したある作品をお見せします。こちらは小嶋崇嗣<sup>37)</sup>の作品です(図9)。ミュンヘンの見本市で買い付けました。極めて美しい光が当たっていて、そして、なおかつ日本の伝統も生かしながら、そこに様々な斬新なアイデアも反映された美しい作品です。

### 13. 質疑応答

私の講演は以上です。この後は質疑応答の時間としたいと思います。皆様、私の発表の内容に関してでも結構ですし、例えば「CODAの会員になるにはどうしたらいいのか」といったことでも結構です(笑)。どうぞ遠慮なく。

**質問者:**今日は色々参考になる資料をありがとうございました。私はまだCODAに行っていないのですが、是非学生とツアーを組んで行ってみたいと印象付けられました。質問ですが、プリンシパル・アーティストという名称が出てきましたが、どういう条件でアーティストを選定されているのかお聞かせいただければと思います。

**レインダース:** どういった判断基準で選定しているかについては、曖昧なお答えしかできません。しかし、私はある意味で具体的な答えを持っています。まずは、エネルギーに満ち溢れたもの、芸術的価値があるもの、力強いもの、美しいもの、そして最近作られたものであること。CODAには、1960年代頃から収

集を続けてきた歴史があります。ですから、それ以前の時代のものは対象外と考えています。なので、それ以後のもので、作られた時代、その作品が存在する現在の社会が反映されているかということを重視しています。

また、私たちとしては、最先端の技法、手法ということで、ジュエリーの工芸的な面を支える色々なツールについても考えていて、エクスペリエンスラボのような3Dプリンターなども採用できる施設を検討中です。また、将来的には、研修制度のようなかたちで一定期間教える仕組みを作れたら良いと思っています。アントワープやアムステルダムにあるそういったアカデミーでは、毎年新入生が入って、1年の間に新たな展示物に触れたり、保管庫にも足を踏み入れるという経験をしています。ですから、我々は学生の方の作品にも目を向けて、もし若い人が作るものが本当に力に溢れていて芸術的な価値があり、そして展示、鑑賞に耐えるようなものであれば、喜んで取り入れたいと考えています。

作品の収集については、委員会があり、そのなかでキュレーターや、私館長自身といった少人数で決定を下しています。判断基準が自分たちの中にしっかりあるので、非常に短い時間で即決できるのです。

**質問者:** 2つ質問があります。まず一つは、オランダ政府ではジュエリーをアートとしてどれくらい認めているのかということ伺いたと思います。もう一つは、私はジュエリー作家として活動していて、どんどん作品を作っていくのですが、残念ながら日本では使う側の気持ちというのはあまり育ってないような気がしています。オランダではいかがなのでしょう？

**レインダース:** オランダ中央政府の中には、ジュエリーを扱う部門というのがあります。政府の認識としては、ジュエリーや宝石がアートの一種であるという認識は育っているようです。ただ、それが国中に浸透しているかというと、そうでもありません。展覧会でプレスリリースを出す際に、ジュエリーという言葉を使った途端に一部の方、特に男性の方から、「ジュエリーというのは女性向けのものだよ」「俺はちょっと興味ない」というような反応が多いということに気づきました。なので、まずはアートの展覧会があります、そしてその中でジュエリーの非常に美しい作品を展示します、というように、最初のうちはジュエリーという言葉を少し控えるというやり方で宣伝することにしました。すると、好奇心を掻き立てられた多くの方が電話やEメールで問い合わせをしてくるようになりました。ただもちろん、これでも本当に十分ではなくて、我々としても奮闘中です。オランダでも、かなり多くの点数を所蔵しているコレクターも増えてきていますが、そのスピードは我々が望ましいと思っているほどではありませんので、これからもっと頑張らないといけないのです。そのためどうすればいいかと、私たち自身がジュエ

リーを推進する立役者として、アンバサダーとなるということです。私自身、オンノ・ブックハウトの作品をいくつか持っていて、トヨタのカローラについているライトをかたどったようなアクセサリを身に付けて地下鉄などに乗っていると、周囲の人が話しかけてきたりします。そこから始まるコミュニケーションによって、世界を広げていく。また巡回展によって、より広く世の中に知らしめていく活動が望まれるかなと思います。

**質問者：**作家として、やはりたくさん作りたいし、表現したいと思っているのですが、なかなか受け取ってもらえないと不安になる時があります。お話を伺って、オランダでも一般の方にジュエリーが浸透していくまでには少し時間がかかるということや、ジュエリーを推進するために目立つようなものをつけたり、努力もなされているということが分かりました。私たち自身は、作家として作品を作ることでちゃんと生活が成り立つようにしたいとも思っていて、そのために作家はどういう努力をしていくべきなのかなということをお答えしたいと思います。

**レインダース：**そうですね、まず悲しいお知らせがあります。オランダにおいてもアーティストが数多くいるなかで、本当にそれだけで生計を立てられているのは、わずか5パーセントにしかすぎません。ほとんどの方は、他で教えていたり、あるいは他の職業についていたりして、兼業している仕事の残り半分の時間を費やして、片手間にジュエリーを作っているという状況です。ですから、自分の作品の制作だけで生計をたてるのが難しいという点では日本と変わりません。そこで、私からちょっと意地悪な質問ですが、ご自身はいまご自分が作られたジュエリーを身に付けていらっしゃいますか？

**質問者：**いまピアスだけは一応着けています。

**レインダース：**そうですね。私が言いたかったのは、ジュエリーを広めていくための行動として、何をしなければならないのかということです。車を売れば車庫に置いておくのではなく、見せなければ売れません。それと同じで、ジュエリーもまた身に着けることによって、世の中の人の目を開いてあげる、紹介してあげることが必要です。多くの人は、コンテンポラリー・ジュエリーのことを何も知らないのです。そういう人たちにに対して、この世の中の美しいものをもっと見てもらい、彼らの理解を助けてあげてほしいと思います。

**司会：**レインダース館長、ありがとうございます。館長のお話を伺って、私たちそれぞれが今この瞬間からジュエリーのアンバサダーになってジュエリーをもっと盛り上げていければと思います。本日のご講演ありがとうございました。

構成・文責 岸本紗和子・島田里都子(東京国立近代美術館工芸課研究補佐員)

## 註

- 1) CODAミュージアム(CODA Museum)オランダの中央、アペルドールン州に位置し、公共図書館、街の公文書館および歴史博物館、近代美術館の3つの機能を持つ文化施設である。約9000点超のジュエリー作品を所蔵。ジュエリーのほか、作家の手紙類、素描、油彩画等の周辺資料もコレクションに含んでいる。ジュエリー作品の常設展示がある。定期的にジュエリーの特別展を開催する。
- 2) 講演では豊富な図版により、オランダのコンテンポラリー・ジュエリーの現状が紹介された。誌面の都合上ここではほとんどの図版を割愛せざるをえなかった。本講演で触れられている作家や作品については以下をあわせて参照されたい：Carin E. M. Bijl-Reinders, *Redefining jewellery: sieradencollectie CODA Museum*, Eva Schaap ed., CODA, 2016.
- 3) デビッド・ビランダー(David Bielander, 1968-) スイスのパーゼル生まれ。1989-93年にパーゼルの金細工師に師事し技術を習得。ミュンヘンの造形美術大学では、オットー・クンツリーの下で学んだ。2010年コンテンポラリー・ジュエリーの国際コンペティション「シュムック」でヘルベルト・ホフマン賞など受賞多数。
- 4) ファン・レーカム美術館(Van Reekum Museum)1960年代に資産家のファン・レーカム家が創設した基金により、アペルドールンの議会は、視覚芸術の美術館を建設し運営することができるようになった。2000年に入ってファン・レーカム美術館は、図書館、歴史博物館等とそれぞれ独立を保ちながら融合することになり、CODAミュージアムとして生まれ変わった。ファン・レーカム家へ敬意を表し、CODAミュージアムの展覧会会場の一部は、現在も「ファン・レーカム」の名前を冠している。
- 5) オンノ・ブックハウト(Onno Boekhoudt, 1944-2002)オランダのヘレンドールン生まれ。1968年にドイツのアフォルツハイム応用美術学校を卒業した。1974-90年、オランダのヘリット・リートフェルト・アカデミーで教鞭をとり、1990-2002年にはロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アートでも教えた。
- 6) クリス・ステーンベルゲン(Chris Streenbergen, 1920-2007)アムステルダム生まれ。1939-42年オランダの応用美術教育研究所(現ヘリット・リートフェルト・アカデミー)で学んだ。1985年には、ボイマン・ファン・ペーニンゲン美術館で回顧展が開催された。
- 7) ニコラス・テュイス(Nicolaas Thuys, 1927-89)オランダのホルン生まれ。彫刻家、製図工、金細工師として活躍した。アカデミー・オブ・ビジュアル・アーツ・アーネム等で教育を受けた。フロニンゲンのミネルヴァ・アカデミーで長年教鞭をとった。
- 8) ヘレン・ブリットン(Helen Britton, 1966-)オーストラリア生まれ。ミュンヘンの造形美術大学で、オットー・クンツリーの下で学んだ。2002年に独立。現在、作品は、オーストラリアのナショナル・ギャラリーやニューヨークのメトロポリタン美術館等に収蔵されている。
- 9) リサ・ウォーカー(Lisa Walker, 1967-)ニュージーランド生まれ。1995-2001年ミュンヘンの造形美術大学で、オットー・クンツリーの下で学んだ。
- 10) マリア・ヘイス(Maria Hees, 1948-)オランダのベルゲアイク生まれ。1975-79年アカデミー・オブ・ビジュアル・アーツ・アーネムで学んだ。
- 11) ポール・デレス(Paul Derrez, 1950-)オランダのシッタード生まれ。1972-75年スコーンホーフェンの職業アカデミーで金工を学んだ後、自らスタジオを持った。以後、オランダ国内、ヨーロッパ各地の国際展に出品しており、作品はオランダの様々な美術館のほか、欧米の個人コレクションにも収められている。1976年実験的ジュエリーの為の「ギャラリー・ラ」をアムステルダムに設立。

- 12) エミ・ファン・レールサム(Emmy van Leersum, 1930-84) オランダのヒルフェルスム生まれ。1958-62年オランダの応用美術教育研究所(現ヘリット・リートフェルト・アカデミー)ジュエリーデザイン科に学び、1962-63年スウェーデン国立芸術工芸デザイン大学に学んだ。1965年ハイス・バックカーと結婚し共同のアトリエを開いた後、最初のジュエリー展を開いた。
- 13) ハイス・バックカー(Gijs Bakker, 1942-) オランダのアムスフォールト生まれ。1958-62年オランダの応用美術教育研究所(現ヘリット・リートフェルト・アカデミー)に学び、1962-63年にはスウェーデン国立芸術工芸デザイン大学に学んだ。1965年エミ・ファン・レールサムと共にアトリエを開いた。現在は、ジュエリーデザインに始まり、ホームアクセサリ、電化製品、家具、インテリア、展覧会、公共スペースなど多方面でのデザインを行なう。1996年よりMarijke Vallanzascaと共にジュエリーブランドを立ち上げる。
- 14) ドロテア・プリュール(Dorothea Prühl, 1937-) ポーランドのヴロツワフ生まれ。1957-62年まで、ハレ・ブルグ・ギービヒェンシュタイン美術学校で学び、ブルグ・ギービヒェンシュタイン美術大学で1994-2002年まで教授として教鞭をとった。
- 15) アンティエ・ブローイヤー(Antje Bräuer, 1972-) ドイツのグロッセンハイン生まれ。1993-2001年ハレ・ブルグ・ギービヒェンシュタイン美術学校で学び、ドロテア・プリュールなどからレッスンを受けた。現在はドイツのブランデンブルクを拠点に活動。
- 16) キャスリーン・フィンク(Kathleen Fink, 1975-) ドイツのハレ生まれ。1995-2001年ハレ・ブルグ・ギービヒェンシュタイン美術学校で学び、ドロテア・プリュールなどからレッスンを受けた。現在、ハレを拠点に活動。具象的な作品を制作することで知られる。
- 17) ルーシー・サーニール(Lucy Sarnel, 1961-) オランダのマーストリヒト生まれ。1985-89年、ヘリット・リートフェルト・アカデミーで学んだ。
- 18) アンネリース・プラントタイド(Annelies Planteijdt, 1956-) ロッテルダム生まれ。1978-83年ヘリット・リートフェルト・アカデミーで学んだ。
- 19) オットー・クンツリー(Otto Künzli, 1948-) スイスのチューリッヒ生まれ。1965-70年チューリッヒ造形美術学校(現チューリッヒ芸術大学)で学ぶ。社会におけるジュエリーの役割を、作品を通して明らかにする手法は、多くの後進に影響を与えている。
- 20) デイヴィッド・マンデル(David Mandel) コスチューム・ジュエリー、劇場や音楽イベントのための舞台用小品などを手がける。ニューヨークのコスチューム・ジュエラーのラリー・プラバに師事。アート・ステューデンツ・リーグ・オブ・ニューヨークでも5年間学ぶ。ライムストーンやスワロフスキークリスタルを用いた大振りのジュエリーは、コレクターアイテムとして人気を博している。
- 21) ジェム・キングダム(Gem Kingdom) オランダを拠点に活動を展開するジュエリーブランド。画家のJohanna Titselaarと、Bernard Jongstraによって1990年に設立。宝石、銀、真珠、合成樹脂など様々な素材を自由に選び独自のスタイルを築き上げる。最近では、ファッションブランドのディーゼルやセリーヌのジュエリー・コレクションのデザインも手がけている。
- 22) ステファン・ホイザー(Stefan Heuser, 1978-) ドイツ生まれ。ミュンヘンの造形美術大学で、オットー・クンツリーの下で学んだ。ミュンヘンで活動。
- 23) アレクサンダー・ブランク(Alexander Blank, 1975-) ミュンヘンの造形美術大学では、オットー・クンツリーの下で学んだ。
- 24) テッド・ノートン(Ted Noten, 1956-) オランダ生まれ。1983-86年にはマーストリヒトの応用美術アカデミー、1986-90年にはアムステルダムのヘリット・リートフェルト・アカデミーで学んだ。
- 25) ルード・ピーターズ(Ruud Peters, 1950-) オランダのナールトウエイク生まれ。1970-74年ヘリット・リートフェルト・アカデミーで学んだ。
- 26) フェリケ・ファン・デル・リースト(Felieke van der Leest, 1968-) オランダのエメン生まれ。1991年よりヘリット・リートフェルト・アカデミーで学び、ニッティング技術を使って作品を作るようになる。さらに動物のぬいぐるみを作品に取り入れることを考案し、フィギュアとニッティング、そしてシルバーやゴールドのメタルクラフトを融合させたユニークなジュエリーを制作する。
- 27) テルヒ・トルヴァネン(Terhi Tolvanen, 1968-) フィンランドのヘルシンキ生まれ。1993-97年ヘリット・リートフェルト・アカデミーで学んだ。木材、石、織物、コンクリート真珠、陶磁器など様々な素材を使って制作している。
- 28) ベッペ・ケスラー(Beppe Kessler, 1952-) アムステルダム生まれ。ヘリット・リートフェルト・アカデミーでテキスタイルを学び、その後、絵画やジュエリーの制作をはじめ。金属・木・樹脂などの様々な素材と、ペイント・刺繍・切削・ソーイングなどの技術を組み合わせたジュエリーを数多く発表。
- 29) ネル・リンセン(Nel Linssen, 1935-2016) オランダのオモク生まれ。アーネムの美術アカデミーで学ぶ。紙を使ったジュエリーで知られる。
- 30) ルイス・アコスタ(Luis Acosta) アルゼンチンのコルドバ生まれ。ヘリット・リートフェルト・アカデミーでテキスタイルを学び、1996年から紙を使った作品を作り始めた。現在は、オランダのユトレヒトを拠点に活動している。
- 31) 小倉理都子(Ogura Ritsuko, 1951-) 大阪生まれ。1973年帝塚山短期大学研究科修了。1978年中村ミナトに師事。1980年代より、国内外で多数のグループ展、個展、展覧会、アートフェアに参加。様々な素材を駆使し枠にとらわれない実験的な存在感のあるジュエリーを発表し、国内外で活躍している。
- 32) ティネ・デ・ルイセル(Tine De Ruysser) 1995-99年にアントワープ王立芸術学院、その後ロイヤル・カレッジ・オブ・アートでもジュエリーデザインを学んだ。紙幣を折りたたんで制作したジュエリーを発表している。
- 33) ローレン・ヴァネッサ・ティックル(Lauren Vanessa Tickle) 2009年ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン卒業。通貨の本質的な価値を探る1ドル札を使った作品Increased Valueを制作した。
- 34) キャロライン・ブロードヘッド(Caroline Broadhead, 1950-) イギリスのリーズ生まれ。1978年よりブライトン大学で教鞭をとり、1982年には、クラフツ・カウンシル奨学金を受けて、アムステルダムで制作した。英国やオランダにおける個展をはじめ、ヨーロッパ各地で開かれた展覧会への出品も多い。
- 35) ラム・デ・ウォルフ(Lam de Wolf, 1949-) オランダのバトヒューフェドルプ生まれ。1979-81年アムステルダムのヘリット・リートフェルト・アカデミーでテキスタイルを学ぶ。作品はアムステルダム市立美術館ほかに収蔵されている。現在は、アムステルフェーンで制作を続けている。
- 36) ハンス・アッペンツェラー(Hans Appenzeller, 1949-) 1966-70年にヘリット・リートフェルト・アカデミーで彫金を学ぶ。1969年にグラフィックデザイナーのヴィム・クロウェルによって開かれたGallery Sieraadは、アッペンツェラーも創設に携わったが、オランダで初めてコンテンポラリー・ジュエリーに特化したギャラリーであった。
- 37) 小嶋崇嗣(Kojima Takashi, 1975-) 京都生まれ。京都造形芸術大学環境デザイン学科建築コース卒業。大学で建築を学ぶ傍ら、彫金教室でジュエリー制作についても学んだ。大学在籍中にイタリアへ渡り、フィレンツェの彫金工房での制作経験も積む。作品は、セッティング技術をベースとした構築的で独特のデザインが特徴である。近年はプラモデルに用いられる素材による作品も手がける。

